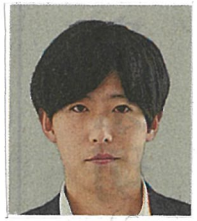
記者の視点

保全、活用へ知恵絞ろう

増毛山道 山岳古道として注目



留萌支局
吉川（よしかわ）　幸佑（こうすけ）

江戸末期に開かれ、日本海沿岸の留萌管内増毛町と石狩市を結ぶ「増毛山道」について、日本山岳会（東京）が全国120カ所の山岳古道で行う現地調査の対象に選んだ。住民有志が2016年に復元し、維持管理を続けた成果の表れだ。文献に残る道内の山道は30カ所ほどあるが、大部分は草木が茂って痕跡をとどめていない。当時の文化に触れる歴史遺産として価値があり、増毛山道は流行するトレッキングに活用されている。各地で保全活動を広げてほしい。

増毛山道は1857年（安政4年）、南下政策を進めるロシアへの防衛策として開削された。その後は生活道路となったものの、戦後に往来が途絶えた。鬱蒼（うっそう）としたササに覆われ、地図から消えたが、住民らでつくるNPO法人「増毛山道の会」が航空写真などを頼りに山道を確認。草刈りや倒木の撤去を続け、8年がかりで復元した。明治時代に分岐路として開かれた5キロ分を含め計32キロを切り開いた。

17年に国土地理院の電子地図で「復活」し、翌年には北海道遺産に認定された。日本山岳会の全国調査には、渡島管内福島町の殿様街道（約7キロ）と共に選ばれ、同会は「歴史的価値や距離などの条件を備え、北海道を代表する山道」と評価する。120の山道は25年までにガイドブックとして書籍化される。

増毛山道のトレッキングツアーで、参加者を案内するガイド（先頭）＝9月28日

復元された増毛山道の経路

増毛山道の会は山道を巡るトレッキングツアーも手掛ける。ガイドの育成も行い、約10人が活動に加わる。正会員・賛助会員合わせて約200の個人と法人が加入。インターネットで活動費を募ると、道内外の112人から114万8千円が集まり、支援の輪は広がっている。

課題は会員の高齢化対策だ。中心メンバーは70歳を超え、7キロある草刈り機を担いでの往来は不安とこぼす。ボランティアなどで札幌や旭川から毎回十数人が協力しているが、小杉忠利事務局長（81）は「会の中心となる後継者は見つからない」と明かす。

日本山岳会道支部によると、道内には日高管内の様似山道（様似町、約7キロ）や猿留山道（えりも町、約7キロ）があり、維持管理は各町が担う。増毛町は地元の暑寒別岳（1492メートル）の登山道整備や遭難時の対応を優先することを理由に協力は困難で、堀雅志町長は「維持管理の継続には、情熱を持った後進を探すほかない」と理解を求める。

一方、山道は登山道と比べて急勾配が少なく、岩盤ではない軟らかな地面が多いため、トレッキングに適している。増毛山道の道中には明治時代に設置され、標高の基準点を示す標識「一等水準点」や電報通信に使った電柱などが残るなど「発見」も多い。樹木医を招いた森林浴や中学生による体験学習も行われ、歴史遺産を活用している。

山岳古道の多くは江戸から明治期に開削され、道内は文献以外では把握できていない。「確認できた約30カ所のうち、復元された山道は5カ所程度」（日本山岳会道支部）とごく一握りだ。

山道の復元・保全に当たっては、行政支援や民間主導の取り組みには限界がある。山歩きには遭難の危険やクマとの遭遇もあり、ガイドの育成が不可欠だ。ただし、「観光資源」として捉えることで、山道の価値を見直し、活用につなげられるのではないか。

今月10日、増毛山道のトレッキングに参加し、中腹から終点までの約10キロを歩いた。慣れない山歩きに息が上がったが、きれいにササが刈られて延びる道に、増毛山道の会が込めた「後世につなぐ」という思いを強く感じた。